

詩篇 130 篇

都上りの歌

《赦しの神への信頼》

- 1 主よ。深い淵から、私はあなたを呼び求めます。
- 2 主よ。私の声を聞いてください。私の願いの声に耳を傾けてください。
- 3 主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立ちえましよう。
- 4 しかし、あなたが赦してくださるからこそあなたは人に恐れられます。

《贖い主の待望》

- 5 私は主を待ち望みます。私のたましいは、待ち望みます。私は主のみことばを待ちます。
- 6 私のたましいは、夜回りが夜明けを待つのにまさり、まことに、夜回りが夜明けを待つのにまさって、主を待ちます。
- 7 イスラエルよ。主を待て。主には恵みがあり、豊かな贖いがある。
- 8 主は、すべての不義からイスラエルを贖い出される。

120 篇：カナンの地の外に住む者の歌

121 篇：巡礼の旅の歌

122 篇：エルサレム神殿到着の歌

123-133 篇：祭で歌われる祈り

134 篇：帰路に着く者への祝福の祈り

貴き御神よ 悩みの淵より

呼ばわるわが身を 顧みたまえや

御赦し受けずば 厳しき審きに

誰かは堪うべき

これは讚美歌 258 番 1 節の歌詞ですが、本篇の 1～4 節の内容と一致しています。「悔い改め詩篇」の一つに数えられ¹、書かれた時代は捕囚後のエルサレム復興期と考えられています。ネヘミヤ記 13 章を読むと、せっかく神殿が再建されて再出発したユダヤの民が、もう墮落し始めていることが分かります。そのときにネヘミヤが民を代表して悔い改めの祈りをささげたことをイメージすると、今日の内容は理解しやすくなるでしょう。

繰り返し「主よ」と呼びかけているところに、詩人の必死な思いが滲み出ています。「深き淵」と訳されていることばは本来「深い所」ですが、どん底に突き落とされ神の御顔の光が見えなく

¹ 6、32、38、51、102、130、143 篇

なった「霊的暗黒」を表すのにふさわしい表現です。まるで海の底から光を求めて手探りをするように、神に祈っているのです。自分の罪、自分の民の罪をそれほど自覚する詩人の心に学びたい。「主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立ちえましよう」（3節）、「しかし、あなたが赦して下さるからこそあなたは人に恐れられます」（4節）という印象的な二つの節は、人には不義があること、しかし神はそれを十分に知りながら赦しを与えてくださるといふ二つの真理を語っています。私たちは「赦された罪人」として神の御前に立つのです。赦されるために不可欠なのは悔い改めでありますから、自分の心が開き直っていないかどうか、常に自己吟味が必要です。

後半では5～7節にかけて「待ち望みます」「待ちます」と連呼されます。「待つ」(קָוָה/カーヴァー)という語には「探す」「望む」「期待する」などの意味も含まれていて、神からの応答に期待を寄せる詩人の思いを読み取ることができます。赦しのメッセージは何によってもたらされるのでしょうか。それは「主のみことば」(5節)によってです。罪の赦しの福音は旧約の思想にも連綿と流れており、それを成就するためにキリストは来られました。主イエスご自身が「神のことば」であり、赦しの福音そのものと言えます。

6節には「夜回りが夜明けを待つ」という表現が出てきますが、夜の間暗闇の中で務めを果たしていた番人が夜明けの光とともにホッと嘆息する様子を描いています。夜中に襲いくる敵や泥棒から守られることを願う警備員のような心境でしょうか。様々な状況において、光とは希望を意味することが多いです。仮に本篇が書かれた背景にネヘミヤの経験があるとするなら、彼は民の罪が赦されるための神のことばを求めてやまなかったということになるでしょう。7節と8節で「イスラエルよ。主を待て」「すべての不義からイスラエルを贖い出される」と、民の問題に拡大されていることから、蓋然性のある解釈と言えそうです。

本篇は読者に「罪の自覚」について考えることを求めています。私たちは自覚的に罪を犯すこともあれば、薄々「これは罪なのではないか」と感じながら悪習慣をやめられないでいることもあり、また罪であることに気づかずに何かを行なっていることもあります。それらを明確化するのも「神のことば」でありますから、聖書の聖いことばによって常に自分の生き方が照らされていなくてはなりません。ある時、誰かの言葉によって、自分の中でもやもやとしていたものが整理されることもあります。御言葉を受け入れる用意が心にあるかどうか重要です。